## はじめに学史にならない営みの歴史

## 伊藤慎吾



たり前の状況であった。まじめに研究するようなテーマとは思われていなかったのである」(『同』「新書版 あとがき」二〇〇七年執筆)。 ない。「妖怪」という文字が書名に掲げられると、好事家の興味本位の本であろうと思われてしまうのが当 「あとがき」一九九四年執筆)。「原著刊行当時は、まだ妖怪研究の意義は今日ほど認知されていたわけでは ることがある。「そのころ、日本の妖怪に関心をもつ民俗学者や人類学者は皆無に近かった」(『妖怪学新考』 今日の妖怪研究の礎を築き、後続の研究者を牽引してきた小松和彦が一九八○年代を語る時、遠い眼をす

伝統的なムラ社会が解体する中で民俗学の再考が求められ、世界を見渡せば、社会主義国家の崩壊を目の当 たりにした歴史学もまた唯物史観に代わる理論構築を迫られる時期であった。 九八〇年代当時の妖怪研究に対する冷ややかな眼差しが伝わってくる。国内を見れば、 都市化が進み、

危うい状況が隣接諸学との連携を模索する機運を生み出した。学際的な研究によって日本史や民俗学、宗教 各分野が細分化され、それこそが高度な専門性の証明であったが、この時期、 人文諸学の置かれた

られるようになった。妖怪に関して多分野を糾合して研究しようという動向も、こうした大きな流れの中で 学、日本文学、美術史学などが結び付き、また従来とは異なるパラダイムによる問題提起なども盛 んに試み

位置付けていくものだろう。

量 一は膨大である。 それから幾年月が過ぎたであろうか。それぞれの分野で妖怪研究が進展し、細分化され、 もはや妖怪研究の専門家でなければ全体を総括することさえ一苦労するようになった。 蓄積された情報

とは言い難い研究者が出た程度で、全体としては大して進展も見せずに停滞したままだったという認識であ に柳田國男がやっていたが、 る。しかしそれは一面的なものに過ぎない。 私などは、 なんとなく、妖怪研究は小松から始まったような歴史認識を持っている。 戦後は今野圓輔や谷川健一のような、 世間的にはどうであれ、 それ以前はずっと昔 学問的には正統

り、 が確 巌らの著した妖怪の研究書があったのである。アカデミズムとは離れたところで流れていた妖怪 史的に叙述する識者がいたのである。漫画家水木しげるもその一人だ。そして、その周辺には佐藤有文がお 妖怪に関心のある人々を導く先達となっている。本書の執筆陣は、 同時期には山田野理夫、斎藤守弘、中岡俊哉らがいた。そして彼らの手元には江馬務や藤澤衛彦、『中期には山田野理夫、斎藤守弘、中岡俊哉らがいた。そして彼らの手元には江馬務や藤澤衛彦、 かにそこにはあった。そしてそれは京極夏彦や村上健司、多田克己といった、 松以前には、 確かに学術性が高いとは言えないが、しかし、様々な妖怪を収集・整理・分類し、 その流れを汲む面々である。 今日、 野に在って多くの 研究の系譜 また歴

領分において、それぞれ右に出る者がいない特殊な知識・情報とコレクションと異能を持っている。だから 主力として編集にも尽力した氷厘亭氷泉をはじめ、本書の執筆陣は生粋の妖怪馬鹿である。そして、その

本書で初めて記される知見や初公開の画像資料も少なくない。

どんな人がどのように妖怪を研究してきたのかを知ってもらおうという目的を持っている。そして、 くば衆生を異界に誘わんとする悪魔の書、もとい案内書としての役割も担っているのである。 それはそれで妖怪マニア垂涎の珍本になるだろうが、しかし本書は一方で、妖怪にあまり関心のない読者に、 こういう人たちであるから、好きに書かせたら、とんでもないマニアックな本になってしまうに違いない。 あわよ

ねに成るものではなく、個々人の関心や必要性から発信されたものであり、また、学界として知識を蓄積 伝体〉という古風なスタイルを採ったのは、妖怪学の前史が、 記事は面白い。本書では、そうした原稿を書いた人々を、 めに大変な時間と労力と資金を投じて資料を集め、研究し、 妖怪を面白く語る人々こそ面白い。学問的成果にもならない、言ってみれば趣味のようなものだ。そのた 総勢二三名取り上げた。人物の伝記を並べる 原稿を書く。打算を抜きにして書き上げた本や 小松以降の妖怪学のように学問史的な積み重

をしていたのかを掴めるように構成した。そして明治大正昭和戦前期、 くして、 本書では人物ごとに妖怪学との関わりを記述し、どういった人が、いつごろ、どんな妖怪研究 昭和戦後期前半、同期後半と大きく

共有し、後に繋げる動向が見られないものだからである。

三つの時期に区分して、通史として緩やかな妖怪研究の流れを叙述した。また、それぞれの時期の特徴的な

事物を〈妖怪学名彙〉として立項した。

もよし、拾い読みするもよし、好きなように読んでいただきたい。ではご高覧あれ。 妖怪そのものではなく、妖怪をめぐる人々に注目して作った本は、おそらく本書が最初だろう。通読する

アマビヱ再来第二の年辛丑十月吉日

伊藤しるす